

「戦前・戦中・占領期日本語教育資料」の分類について

東京外国語大学附属図書館に寄贈されました 286 点は、戦前・戦中・占領期の日本語教育事業における出版物のうち、今日入手しにくい教科書中心のコレクションです。日本語教育事業を実施していた主たる機関別、また地域別に、以下のように分類しました。

→ [戦前・戦中・占領期日本語教育資料 全点リスト \(分類順\) \(Excel ファイル\)](#)

※ 本文中の書名をクリックし「許可」を選ぶと、東京外国語大学学術成果コレクションの書誌データが表示されます。そこで登録ファイルの「見る/開く」をクリックすると、本文画像が表示されます（ただし、電子公開可能なもののみ）。本文画像の表示には DjVu ビューアが必要です。詳しくはヘルプ (<http://repository.tufts.ac.jp/help/index.html#image>) をご覧ください。

1. 日本語教育振興会の刊行物

同会が出版した日本語教科書、指導書、啓蒙書などの大半がそろっています。ただし、機関誌である月刊『日本語』は、1988年に冬至書房より出た復刻版が本学附属図書館で閲覧できるため、本コレクションからは除きました。中国の子ども向けの入門書『ハナシコトバ 上・中・下』とその教師用指導書が最も有名で、(財)言語文化研究所から復刻も出ていますが、『ハナシコトバ』は復刻版では一部を除き白黒印刷になっています。原本はすべて多色刷りで、美しい絵本のような感じです。また、『ハナシコトバ 上・中・下』の点訳本は本コレクションの貴重なものに属します。当時の日本の日本語普及は「大東亜共栄圏のすべての人に」という考えで行われましたから、障害者への対応も考えられていました。『ハナシコトバ』の編纂は、日本語教育振興会設立以前にさかのぼり、文部省の日本語教科用図書調査会が作成したものを座談法人東亜同文会が発行しましたが、日本語教育振興会発足後は発行所はこちらに移りました。教師用の『ハナシコトバ学習指導書』は長沼直兄が書いたものです。直接法による日本語の入門指導の要領が丁寧に書きこまれている教師用マニュアルで、事業の目的を超えて日本語教師の直接法での指導の指南書として貴重な役割を果たしました。ここには『ハナシコトバ』の続きにあたる中国の学童用の『日本語讀本』や、南方諸地域用の『日本語教本』また、『南方諸地域用日本文法教本』などがありますが、いずれにも、丁寧な教師用指導書が作成されているのが、日本語教育振興会の出版した教材の大きな特色です。これは当時、中国大陸へ、やがては南方諸地域へ、数週間の養成講座を経て大量の日本語教師が派遣されたという背景によるものです。彼らの多くは現地語を解さず、日本語教育の経験を持ちませんでした。そうした人にも教えられるように、日本語のみによる直接法での入門の指導法が丁寧に記されました。全ページ、カラー印刷の「支那学童用絵本」は目録にある8種のうち6種が本コレクションに収められています。中国の子どもたちに日本への憧れと関心を喚起するよう、当代一流の画家による美しい絵で質のよいものを目指した成果です。南方用の『学習日本語』は、ジャワ編、ビルマ編、マライ編、フィリピン編があります。各巻、2編のテキストが収められていますが、最初の1編は共通のもの、もう1編はそれぞれの地域に材をとった「ご当地もの」となっています。定期刊行物として継続して発行される計画でしたが、3冊までで終わりました。3冊目は1945年4月の発行ですが、戦況の悪化から現地に届

いたかどうかわからないようです。

→ 別紙資料 日本語教育振興会事業概要（1944）

2. 同時代の国内他機関で発行された日本語教科書および学習書

日本語教育振興会では、日本の内外の日本語教育関係の情報を集めていました。日本語教育振興会の蔵書には、内外の関連機関による出版物や教科書などが多く含まれています。2では日本国内の主だった機関別にその教科書をはじめとする出版物を整理しました。

2-1 東亜学校（関係）・・在日中国人留学生用教科書、松本亀次郎の著作ほか

東亜学校の前身は、1914年に松本亀次郎（1866-1945）が中国人協力者とともに日本で学ぶ中国人留学生のための教育機関として設立した「日華同人共立 東亜高等予備学校」です。松本亀次郎は静岡に生まれましたが、1900年に佐賀県師範学校教諭となり、1902年に観察した佐賀方言を記述した『佐賀方言辞典』を共編刊行しましたが、これは日本で最初の本格的な方言辞典だと言われます。翌年、37歳で上京し中国人留学生のための日本語教師となりますが、これは『佐賀方言辞典』を評価した上田万年から声をかけられた結果です。松本亀次郎は、魯迅や周恩来らに教えたことでも知られ、優れた教師として教え子たちによって中国で高く評価されています。『漢譯日本口語文法教科書』（1938）、『譯解 日語肯綮大全』（1934）など優れた日本語教科書や学習書は版を重ね、長く多くの中国人学習者に使われました。学校は関東大震災で焼失し、経営の困難から財団法人日華学会に譲渡されました。このとき校名が「東亜高等予備学校」となり、やがて1935年に「東亜学校」と改称しました。戦争中は中国における日本の占領地からの留学生受け入れ機関となり、戦後は閉校となりました。

ここには、「東亜高等予備学校」、「東亜学校」出版の教科書『日本語のはじめ 第一篇～第三篇』（1935-1936）、『日本語讀本巻1～3』などのほか、松本亀次郎の著作があります。

2-2 日語文化協会（関係）・・欧米人成人用日本語教科書など

日語文化協会の前身は、1913年10月に東京市長阪谷芳郎（1863-1941）が英米のミッション関係団体の協力を得て設立した日語学校です。宣教師ら欧米人の成人学習者を対象に、最初は東京外国語学校の教室を借りて授業が行われました。松宮彌平（1871-1946）を中心に日本語教育が行われましたが、1921年、彼が松宮日本語学校を設立して日語学校を辞めると、日語学校は宣教師団主導の英語による解説を用いた日本語教育に転じました。

1930年9月、日語学校は文化教育をも重んじるという意味を込めて日語文化学校と改称しました。1932年には松宮日本語学校は日語文化学校との合併に合意し、日語文化学校は松宮彌平主導に戻りました。「説教集」などキリスト教関係の教材ははじめ教材のほとんどは松宮彌平が執筆作成しました。1936年には芝公園に日語文化学校の新築校舎が完成し、1939年には財団法人日語文化協会（理事長：阪谷芳郎）が設立認可を受け、彌平の長男、松宮一也（1903-1972）が主事に就任しました。日語文化学校、（校長：ダーリー・ダウンズ）、日本語教授研究所（所長：松宮彌平）、出版事業部（部長：ジョージ・ホールデン）、日本語海外普及事業部（部長：松宮一也）をたて、それぞれの事業を推進することとなりました。戦争中は、欧米人宣教師らが去り、松宮彌平・一也が中心になりますが、彼らは積極的に外務省、興亜院、文部省、そして日本語教育振興会の日本語普及事業に協力しました。1945

年3月の東京大空襲で芝公園の日語文化協会は全焼し、再建されることはありませんでした。

ここでは、松宮彌平による『日本語會話 卷一～三』(1936-1939)『日本地理』(1937)『説教集』(刊行年不明)などの教材のほか、『日本語教授法』(1936)や日本語文化協会による『ラジオによる日本語普及』(1942)などの啓蒙書もまとめました。英文の『A GRAMMAR OF SPOKEN JAPANESE』や英文解説のついた『日本語會話 卷一～三』は、国際文化振興会の助成を受けて一般学習者向けに出版されたものです。

2-3 国際学友会・・・非漢字文化圏からの在日留学生のための日本語教科書

1935年8月に外務省文化事業部に「国際文化事業」担当の課(当初は第三課、後に第二課)が設置され、中国以外の地域(それまでの文化事業が「対支文化事業」即ち中国向けの事業のみを扱っていたため)を対象とした取り組みを始めますが、その実務機関のひとつとして1935年12月に国際学友会が設立されました。増加した非漢字圏からの留学生の受入れや外国への日本の学生の送り出しをはじめ学生を通じた国際交流の推進を主たる事業としていました。1936年2月、留学生の宿泊施設として国際学友会館が開館し、日本語教室が始まりました。1939年度から次第に本格化し、1940年から1943年にかけて非漢字圏出身の留学生のための日本語教科書として『日本語教科書 基礎編、卷一～五』(1940-1943)が完成、1943年4月に国際学友会日本語学校が開校しました。非漢字圏留学生を対象とした一年課程の日本語学校の最初のもです。国際学友会日本語学校は戦後、一度閉校となりましたが、国際学友会は継続し、1951年に日本語教室が再び始まり、1958年には国際学友会日本語学校が再び開校しました。今日の日本学生支援機構の東京日本語教育センター・関西日本語教育センターの前身にあたります。

2-4 国際文化振興会(KBS)・・・国際文化事業としての日本語普及事業の出版物

1931年の「満洲事変」をきっかけに1933年2月、日本は常任理事国であった国際連盟を脱退しました。日本を巡る国際関係の緊張への対応として、1933年1月から3月にかけて開かれた第64回帝国議会で、世界各国に日本への理解を促す国家的活動の推進についての「国際文化事業局開設に関する決議案」が可決されました。国際的孤立への危機意識、国際社会で「誤解」されているという認識から、「誤解」を解くべく主として欧米諸国を対象に「国際文化事業」への取り組みが調査された結果、1934年4月に国際文化振興会が設立されました。1935年8月に外務省文化事業部に「国際文化事業」を管掌する課が新設されると、国際文化振興会はこの管轄下にはいることになりました。国際文化振興会は直接学習者に教える場をもったわけではありませんが、日本語教育関係の諸機関への資金的援助に始まり、1940年度には「日本語普及編纂事業」に本格的に取り組みました。『日本語表現文典』、『日本語基本語彙』などは戦後の日本語教育にも大きな影響を与えました。国際文化振興会は戦後も継続し、1972年に発展的に改組されて国際交流基金となりました。

『日本語基本語彙』は本学附属図書館にすでに所蔵されていますのでこのコレクションからは除きました。外務省文化事業部による『世界に伸び行く日本語』(1939)はここに含めました。

2-5 カナモジカイ・日本のローマ字社・・・かな文字やローマ字による辞書や日本語教材

1902年に国語調査委員会はこれからの日本の「文字は音韻文字を採用すること」にする決めました。この時、「音韻文字」として採用するのは仮名かローマ字かは調査の上決定す

ることになりました。1964年の国語審議会で「国語は漢字仮名交じりを以てその表記の正則とする」と改めて宣言されるまで、日本語の表記については、かな文字やローマ字のみでの表記が検討されていました。カナモジカイは漢字の不便を取り除き、カタカナによる横書きを普及させることを目的に1920年に設立されました。同じく日本の表記問題をローマ字書きの普及で解決しようとする羅馬字会は1885年に設立され、その主要メンバー田中館愛橘(たなかだて・あいきつ)は、日本式ローマ字を主張して1909年に日本のローマ字社を設立しました。いずれの団体も現在も活動を続けています。特に非漢字圏の人たちへの日本語教育では漢字学習の困難は大きい問題ですから、日本語教育振興会でもカナモジやローマ字による表記の推進者の議論には耳を傾けていたようで、日本語教育振興会の蔵書にはこうした団体による出版物も多く含まれています。ここでは、カナモジカイと日本のローマ字社による持論を具現化した日本語教科書を収めました。国定教科書のローマ字版英訳付『PARALLEL TRANSLATION of the Japanese Primary School Reader 対譯 日本小學國語讀本(上巻) 卷一〜六』は、日系人児童のみならず海外での日本語教育一般でも使われました。

2-6 中央協和会・・・日本国内の朝鮮半島出身者のための日本語(国語)教科書

1923年9月に発生した関東大震災後の混乱で多くの朝鮮出身者が犠牲になったのをきっかけに1924年5月に大阪、1925年に神奈川、兵庫で「内鮮協和会」が発足し、「朝鮮人」の風俗改善、生活改善、教育奨励などを目的に活動しましたが、次第に日本社会への同化がより強く推進されるようになり、全国組織として1939年6月に中央協和会が厚生省の管轄下に設立されました。その主たる活動は、朝鮮人の暴動を抑え治安をよくすること、そして朝鮮人に日本の風俗、生活習慣、日本語に慣れさせよ日本国民にしようという「皇民化」の推進でした。『協和國語讀本』は中央協和会による日本語教科書で、広く配布されました。本コレクションには、その教師用「指導要領」のあるのが特色です。日本語教育振興会の事業には「東京都協和会及中央協和会二対スル協力」も含まれていました。

2-7 その他

日本語教育振興会の蔵書には上記のような組織的なものばかりではなく、多種多様な日本語教科書が残されていました。本学附属図書館の蔵書と重なっていないもので状態の比較的良好なものからいくつかを選んでここにとりあげました。『Suggestion on the Study of the Japanese Language』(1934)の著者、小畑久五郎(おばた・きゅうごろう)は渋沢栄一の英文秘書として、その国際交流において重要な役割を果たした人です。尾島喜久恵による国定国語教科書の英訳、英語による説明付の『HANDBOOKS ON THE NATIONAL LANGUAGE READERS OF JAPAN』は、「日本語と日本の精神」を世界に伝える目的で作成されたとあります。外務省文化事業部では1934年12月にチェコから学生用の日本語教科書をとの求めに応じて、この2点にARTHUR ROSE-INNES(分類4を参照)による教科書を加えて送っています。

阿部正直(1903-1967)はキリスト者で宣教師を対象とした教育実践から『A NEW JAPANESE COURSE FOR BEGINNERS』(1937)を著しました。戦争中は「満洲」でハルビン医科大学日本語科主任教授となりラジオテクニストなども執筆しますが、敗戦でシベリアに抑留され、帰国後も外国人への日本語教授を生涯の仕事としました。『JAPANESE IN THIRTY HOURS(日本語三十時間)』の著者、清岡暎一(1902-1997)は福沢諭吉の孫で、

一時招聘に応じてハワイ大学で日本語を教えていました。福沢の著書の英訳でも知られます。

3・同時代の外地、海外で発行された日本語教科書および学習書

日本語教育振興会の蔵書には、海外諸地域の日本語教育関係の書籍も多く収集されています。日本語教育振興会の主たる設立目的は「大東亜圏内における日本語普及」にあり、当初は専ら中国大陸への普及を推進していました。1942年8月以降は、国の方針で「南方」即ち東南アジア方面への普及事業が活発になります。特に中国の占領地におけるいわゆる「傀儡政権」、華北の中華民国臨時政府（1937年12月に成立。河北省、山東省、河南省、山西省の華北四省に北京、天津、青島を統括）や、維新政府（1938年3月に成立。江蘇省、浙江省、安徽省に南京、上海を統括）、そして、汪兆銘による南京の国民政府（1940年から1945年にかけて日本の軍事力を背景に成立。臨時政府と維新政府を集結した。）の地域で日本の強い影響下に作成されたものが大半を占めます。この時期は、華北では臨時政府と連絡のあった北支軍特務文教班、華中では維新政府の教育部と連絡のあった日本軍総司令部特務教育班といった軍関係者が日本語教育に深くかかわっていました。が、それ以前からその地域における日本語教育に尽力していた大出正篤（おおいで・まさひろ）、飯河道雄（いいかわ・みちお）らの作成教材もあります。

当時、日本の植民地であった台湾、朝鮮、そして国連の委任統治領であった「南洋群島」（サイパン、ヤップ、パラオ、トラック、ポナペ、ヤルート）では日本語が「国語」として公教育で教えられていましたが、これは日本語教育振興会の事業には含まれないこともあり、これらの地域に関するものはあまり多くありません。

一方、ハワイやサンフランシスコの日系人の子どもたちのために現地で作成された教材があります。また、オーストラリアのメルボルン大学の日本語教師をしていた稲垣蒙志（いながき・もうし）による教科書は、珍しいものに属します。

全体が揃っているものは少なく、教材の全貌がわかるわけではありませんが、この時期の、各地での日本語教育事情を垣間見ることができます。地域別に整理しました。

3-1 北京・・「新民印書館」の刊行物ほか

新民印書館の刊行物が目立ちます。新民印書館は日中戦争中の1938年に北京で創立された日中合弁会社で、当時華北で最大の印刷会社として教科書を始め多くの啓蒙書を刊行しています。1945年の日本の敗戦と共になくなりました（引き揚げた日本人によって1947年に東京印書館がつくられました）。『正則日本語講座』は全12巻が揃っています。監修は藤村作、銭稻孫、山口喜一郎で、各巻執筆者は異なりますが、中国語で説明されているのが特徴で、中国人読者に向けて発信されています。特に日本語文法や日本語教授法の巻は全編中国語で書かれています。ラジオ講座に基づいて作成された『北京中央廣播電台短期學習日本語入門』（1941）も中国語によるものです。中央日本語学院は日本の興亜院が北京設置した日本語教育機関でした。『日本語教育参考圖書目録』（1942）では、当時の日本語教育関係の文献が一覧できます。

青島特別市教育局による『小學兒童日本語作文集』（1940）は、当時の青島の子どもたちの日本語作文です。異色なのは Eugene Feifel（1935）『Grammar of Japanese Language 現代日本語日英對譯文法及教材』で、東京で出版されていますが、著者は輔仁大学の教師で北京で書かれていますから、ここに分類しました。英語による日本語教材です。

3-2 上海・・維新政府・江蘇省日語研究会の刊行物ほか

日本の占領地では、日本語教育が推進されましたが、最も力がそそがれたのは学童を対象とするものでした。「傀儡政権」と後に言われるように維新政府は日本の占領政策を推進する一環として、初等教育の科目に日本語を加えました。ここには維新政府教育部による『日本語教科書』（1938）の巻一と巻三があります。日本語教育振興会による中国の学童向け絵本がそうであったように、多色刷りのものを含んだ美しい挿絵が多く、子どもたちの心に訴えるように作成されていることがわかります。江蘇省日語研究会による『日語初歩 上冊・下冊』（1943?）『は、小学校の5年生用と6年生用です。もう1点、渡邊正文の著書は、上海で発行されているにもかかわらず、発行年が昭和で記されています。著者は上海日本高等学院教諭。日本語で日本人に向けて中国人に対する日本語教授法が説かれています。

3-3 「満洲」・・飯河道雄、大出正篤の著書、在満日本教育会、満洲図書株式会社等の出版物

中国東北部では、「満洲」の建国以前から、清国より租借権を得た関東州（遼東半島）や満洲鉄道の利権地域を中心に日本語教育が行われており、20世紀の初めから学校教育で日本語が教えられていました。「満洲」においても、初等教育から日本語が導入されました。「満洲」では日本語は国語の一つとされ、中でも最も力のある言語として学習が奨励されていました。ここには、在満日本教育會教科書編輯部、南満洲教育會教科書編輯部などによる、さまざまな段階の教科書を見ることができます。

飯河道雄は、長く中国で日本語教育に従事していました。飯河道雄（1930）『中日対譯速修日本語讀本』（大連）は、第35版。初版は1924年に出ています。旅順第二中学校長、河南省高等師範学校教授を歴任し、入門から超級まで中国人学習者のための教科書を数多く著しました。大出正篤（1886-1949）も、単独で入門から超級まで体系的な教科書を著した人物です。ここに収めた『日語研究寶鑑』（1936）は、一冊で日本語や日本の文化・風俗・歴史などの要点が学べるものです。大出の教科書は中国語の対訳付きで、これがあることで成人学習者の学習速度は上がると考えていました。直接法を説く山口喜一郎とは対立しており、時に論争をしたりしていますが、いずれも譲ることはありませんでした。

3-4 「蒙古」・・蒙古連合自治政府による刊行物など

「満洲」の成立後、「蒙疆」と呼ばれた内蒙古を中心とする地域では、独立意識が高まり、1937年秋に蒙古・察南・晋北の三つの自治政府が成立しました。1939年秋には、これらを統合しようと、蒙古駐留の日本軍の主導のもとで、徳王（テムチュクドンロブ、徳穆楚克棟魯普）を主席とする蒙古聯合自治政府が樹立されました。中華民国臨時政府・汪兆銘政権下の自治政府という位置づけでした。この地域では初等教育に力が入れられ、そこで日本語が熱心に教えられました。

蒙古連合自治政府民政部による『国民学校用日本語教科書 上冊・下冊』（1940）は丁寧な描かれた美しい挿絵と表音式仮名遣いによる表記が目を引きまします。

さて、ここに収められた3点はいずれも奥付の刊行年に「成紀」という独特の元号が用いられています。これは1206年を元年として数えた「チンギスハーン紀元」の漢字略称で、蒙古聯合自治政府の独立への志が感じられるものです。

3-5 南京・・・国民政府（汪兆銘政権）の刊行物など

ここには、1940年から1945年にかけて日本の軍事力を背景に存在した汪兆銘による南京の国民政府の教育部より刊行された教科書『初中日語』が1から6まで揃っています。日本との関係強化のために、各学校で日本語が教えられることになったと説明されています。いずれも中華民国30年、1941年に一度に作成されたようです。終わりの方の巻はほとんど使われなかった可能性もあります。

漢字の熟語に付ける字音仮名遣いは旧来のものが使われ（「けうしつ（教室）」「ジュゲフ（授業）」など）、和語も歴史的仮名遣いで（「ちひさい」）など、拗音・促音の小書きを採用するというのは珍しいものではありませんが、それに加えてこの教科書には「弟」「妹」が「オトオト」「イモオト」と書かれるなど独特のものが見られます。

3-6 台湾

1895年4月、日清戦争の結果下関条約によって台湾は清朝（当時の中国）から日本に割譲されました。それから終戦まで、台湾は日本の統治下におかれ、公教育をはじめ成人教育においても「国語」としての日本語教育が実施されました。植民地教育としての日本語による教育も含めて、日本時代の台湾の「国語」教育については、夥しい出版物が刊行されています。しかし、本コレクションでは、台湾の教科書類はわずかしかありません。植民地での「国語」教育は日本語教育振興会の事業対象ではありませんでした。

台湾の公学校（初等教育機関のうち日本語を常用しない子どもが通う学校とされ、小学校と区別されていました）で使う国語教科書は、台湾総督府によって1901年から1945年にかけて全五期にわたって編纂されましたが、ここに収められている『公学校用国語讀本巻一』（1938）は、第4期のものです。もう1冊、同じ年に台湾総督府文教局学務課から発行された『日本語教本巻一』がありますが、これは「南支（広東省・海南省・福建省など中国の南部）の中国人子弟のために」作成されたとあります。台湾総督府が中国向けの教科書を作成していたことを示す資料です。

3-7 朝鮮

日本は日露戦争終結後の1905年に「第二次日韓協約」に基づき、朝鮮を保護国とし朝鮮統監府を設置し、1910年秋、「韓国併合」により、大韓帝国政府の組織と統合の上、朝鮮総督府と改組し、朝鮮を植民地としました。翌1911年には朝鮮教育令により「朝鮮人には必ず国語（日本語）を学ばせること、また学校における教授用語は国語とすること」が定められました。以後、1945年の日本の敗戦まで、初等教育から社会教育に至るまで「国語」（日本語）教育が行われました。日本語教育振興会はその日本語普及の対象に植民地は含みませんでしたから、台湾同様朝鮮も直接的な事業対象ではありませんでしたが、台湾のものより多くの教科書類が収められています。全巻揃っているわけではありませんが、初等教育用、中等教育用、社会教育用、教師用指導書などがあり、当時の事情がうかがえます。初等教育用の『国語讀本』は朝鮮の風景や風俗、民族衣装を着た人々の挿絵が多く、特に巻一は絵本のようなようです。『練成教本』は、表からめくると国語の教科書のようなのですが、裏表紙のほうからめくると、生活に必要な算数、数学などがまとめられています。朝鮮総督府によるもの以外にも、農村振興教育研究會による『農村振興国語讀本巻上』なども興味深い資料です。

3-8 南方地域

1942年の夏以降、国の方針で「南方」即ち東南アジア方面への普及事業が活発になり、国内の関連機関では、それまでの予定になかった「南方」向けの事業に取り掛かることを余儀なくされました。ここに収められた「緬甸(ビルマ)」、「南洋」向けの教材はいずれも1942年から1944年に発行されたものばかりで、緬甸日本語教科書編纂委員会、財団法人 南洋協会、南西方面海軍民政府、軍宣傳班、そして日本放送協会(NHK)などによるものです。日本放送協会(NHK)のものはラジオテキストです。「南方各地の放送局」で現地の人々への放送に使うためのものだと説明されています。表紙に大きなラジオと桜、日の丸、富士山が美しい色彩で印刷されているのが印象的です。軍宣伝班による『ニッポンゴノテビキ』は「ラジオテキストに使用」とあり、多言語による説明があります。補助教材として作成されたようです。漢字使用圏ではない南方向けの日本語普及の特色は、漢字を使わずにローマ字あるいは仮名だけで書かれた教材が多いことです。南洋協会による『ニッポンゴノハナシカタ』は学習者用のテキストと教師用の指導書が揃っていますが、挨拶のあと「ほめ方」とあって「えらい」「おいしい」などが並んでおり、日本語によるコミュニケーションを目的とした実用的な内容となっています。

3-9 米国関係

アメリカでの日本語教育は、日系人(主として子ども)用の継承語教育として行われたものと、非日系人用の外国語教育として行われたものに二分されます。

日系人の継承語教育用の教科書として、ここには布哇(ハワイ)ホノル、教育會、また社団法人布哇(ハワイ)教育會による『日本語讀本』と、米國加(カリフォルニア)州桑港(サンフランシスコ)日本語學園編纂委員會による『米國加州教育局檢定日本語讀本』があります。ハワイの『日本語讀本』は初版は1923年、サンフランシスコの方の初版は1924年です。それ以前、初期の日系人教育には日本の国定教科書が使われていたのですが、1920年代初めにハワイでもサンフランシスコでも日系人への圧力が強まり、アメリカ市民である日系人が日本の国民用の教科書で学ぶことが非難されました。それに対応してそれぞれ日系人団体が、アメリカ市民としての日系人教育のための教科書を新たに編纂したのです。欠巻があるのが残念ですが、内容を見ると、当時の人々の努力の跡が見られます。

一方、戦前・戦中のアメリカで非日系人を対象とした日本語教育と言えば、軍関係のものでした。『MODERN CONVERSATIONAL JAPANESE』(1942)の著者、JOSEPH K. YAMAGIWA は、ミシガン大学の陸軍日本語学校の教師として有名な日系人です。BERNARD BLOCH ELEANOR HARZ JORDENによる『SPOKEN JAPANESE BASIC COURSE』もアメリカ軍での日本語教育に用いられたものです。この教科書に準拠した日本人(ネイティブスピーカー)のドリルマスター用のマニュアル『Guide's Manual for Spoken Japanese basic course』は、興味深いものです。当時は軍関係のテキストは門外不出とされ、ここで働いた日本人は仕事を辞めてもここでのことは口外しないことを誓わされたと言います。今日これがこうして閲覧できるようになったのは貴重です。英語ができても決して英語を使わないこと、伝えるべきことは手によるサインで伝えることが指示されていて、以下の本文は、何人もの日本人の手書きで書き継がれています。これは戦後も使われていました。

『ELEMENTARY JAPANESE FOR COLLEGE STUDENTS JAPANESE』は、同じく戦争中のものですが、ハーバード大学で使われていた初級用の教科書で、著者のセルゲ

イ・エリセーエフ（1889－1975）は、ロシア生まれで、19歳で東京帝国大学国文科に留学、卒業後ロシアに戻りますが革命でフィンランドに亡命、その後、フランスのソルボンヌ大学で日本語、日本文学を教え、やがてアメリカに渡りハーバード大学で日本語、日本史、日本文学を教え、多くの後進を育てたことで知られています。

3-10 そのほかの国・地域・・・オーストラリア・マニラの教科書

ここには、上記の分類に入らなかったものを収めました。オーストラリア・メルボルン大学の日本語教師、稲垣蒙志（1883－？）による『日本語讀本巻一～巻三』（1938－1940）は、他であまり見られない教科書のひとつです。稲垣蒙志は、20代でオーストラリアに渡り、1919年にメルボルン大学で日本語教育が始まるに際して日本語講師に就任しました。戦争がはじまりオーストラリア政府が「敵国人」として稲垣を抑留したのに対し、日本語教育でオーストラリアの「国益」に貢献した自分を抑留するのは不当だとして訴訟を起こしたのですが、調査の結果、稲垣の日本語教育は効果をあげていなかったと判断され、意図的に学習を妨げたのではないかとの疑いまでかけられたのでした。

ほかに、マニラの日本軍による英語で説明された日本語入門書『JAPANESE MADE EASY - A SIMPLIFIED GRAMMER WITH PRACTICAL EXERCISES FOR BEGINNERS』（1942）があります。占領地では軍の宣撫班が医療と教育に従事する一環として日本語教育を熱心に行った例もありますが、1942年という時点で、このような英語による教科書は例外的なものと言えます。

4. 参考書であったと思われるさらに古い時代の文献

長沼直兄は、これまで欧米人によって書かれて来た日本語の教科書に広く関心をもっていました。ここに分類する欧文による日本語教科書の類は、1冊（BERLITZによる『日本語教科書ヨーロッパ編』（1909）に日本語教育振興会の蔵書印があったほかは、ほとんどが「長沼氏寄贈」という印を押されたものです。数点、学習者と推測される欧米人名の人物から寄贈されたものもあります。多くが長沼直兄個人のコレクションであったと言えます。先にあげたベルリッツの教科書はヨーロッパで出版されたものですが、それ以外は日本で出版されたもので、幕末から明治、大正、昭和初期に刊行されたものが中心です（Oreste Vaccari & Enco elisa Vaccariの著作の一部は戦後の版です）。

イギリスの公使館通訳生アストン、同じくアーネスト・サトウ、アメリカ人宣教師ブラウン、同じくヘボン、そして日本語研究のために来日し、東京帝国大学博言学の教師となったチェンバレンなどは、幕末から明治にかけて活躍した人物としてよく知られています。イムブリーは日本の連合ミッション会議の実行委員で、日語学校の初期の理事を務めていました。イムブリーによる『WA AND GA』は、「は」と「が」についての研究の早い時期のもので、長沼と同時代の人物としては、ローズイネスとヴァカリーがその代表的人物で、彼らによる教科書は、日本で学ぶ欧米人学習者のほか海外でも広く使われていました。

5. 米国大使館勤務時代の長沼直兄の著作など

ここに分類した書籍は、日本語教育振興会の蔵書ではありません。日本語教育振興会に関わる以前、米国大使館で語学将校らに日本語を教えていた長沼直兄が、その経験から彼らの

ために作成した長沼直兄の初期の代表的な著作『標準日本語讀本 卷一～七』（1931-1934）を中心に、アジア太平洋戦争の時期にアメリカの陸海軍の日本語学校で使われていた私製複製本や、長沼直兄が教室で配付したと伝えられるプリント類をもとに陸海軍の日本語学校で作成された練習や漢字学習用に作られた副教材などをまとめました。これらは日本にはほとんど存在せず、米国でも閲覧が難しくなっていたものを、戦後、(財)言語文化研究所が努力して探し求めて得られたということです。編著者に Joseph K. Yamagiwa という名前が見えますが、彼はミシガン大学におかれた陸軍日本語学校に長く務めた日系人日本語教師の代表的人物です。後の日本文学者、ドナルド・キーンも、この長沼直兄の教材で学びました。キーン氏は 11 か月で巻六までを終えて卒業、日本語の翻訳、訊問の担当者としてハワイの戦地で任務についたということです。『FIRST LESSONS IN NIPPONGO』は英語による日本語の入門書です。ここにあるのは 1946 年 2 月の再版ですが、初版はその 1 年前 1945 年 2 月に出ており、終戦をはさんで生き延びた代表的な教科書です。戦後、1950 年に『改訂標準日本語讀本卷一～卷八』が開拓社から出版され、1970 年代まで日本の内外で長く広く使われました。本コレクションの『改訂標準日本語讀本』は、広く流通したそれではなく、長沼直兄が終戦直後から東京の米軍総司令部参謀第二課日本地区語学科で教えながら改訂を加え、米軍の支援で 1948 年に出版した非売品です。本コレクションならではの教材群です。

6. 日本語教育に関する一般書・啓蒙書

長沼直兄のコレクションや日本語教育振興会の蔵書には、日本語教育に関する一般書や啓蒙書も多く含まれていました。復刻版の出ているものもありますが、本学附属図書館の蔵書にないものを中心に一部をこのコレクションに加えました。山口喜一郎『外国語としての我が國語教授法』（1933）は、台湾、朝鮮、中国と「外地」で、教えた経験から生れた代表的な著作です。『日語教師』の著者矢部春は、「良心的兵役拒否者」として知られるキリスト者、矢部喜好の妻で、夫の死後、中国に日本語を教えに行きました。上甲幹一の『日本語教授の具体的研究』は中国での教授経験で山口喜一郎の影響を強く受け、その教授法について戦後の日本語教育振興会の研究事業の成果です。

(河路 由佳)